



『ライブ争点整理』

林道晴、太田秀哉 編 有斐閣 2,400円(本体)

一橋大学教授 山本 和彦

本書は、民事訴訟の想定事案について裁判官と当事者双方の訴訟代理人との間における争点整理のやり取りを再現したものである。具体的には、借用証のない親族間の貸金事件、浄水装置の代理店契約事件、退職者の競業禁止義務違反事件、美容室設備の空リース事件という4つの事案（File）について、代理人の訴訟前の活動から訴訟提起まで（Scene 0）、そして各期日（Scene 1以降）の具体的なやり取りが逐語形式（ライブ）で記録されている（その間に訴状や準備書面、主要な書証等が織り込まれる）。そのハイライトは各期日ごとに、期日前に代理人や裁判官が考えたこと、手続の概要、期日での具体的なやり取り（各当事者・裁判官の発言のほか、実際には発言されなかった「つぶやき」も含まれる）、期日後に代理人や裁判官が考えたことが記録される。

本書の意義として、第1に、争点整理の具体的なやり取りが「見える化」された点がある。争点整理は非公開の手続で、訴訟記録にも概要が記載されるに止まり、具体的にどのようなやり取りがされているのか、フォローできないという意味で、「ブラックボックス」であった。本書はそれを見事に「見える化」している。

第2に、練達の裁判官・弁護士を編者に、中堅の裁判官・弁護士を執筆者として、綿密な打ち合わせの下に（架空の事案についてであるが）、真に迫った「ライブ」として読み応えのある仕上がりとなっている。争点整理の実像を実感できる。

第3に、期日でのやり取りにある「つぶやき」も面白い。代理人や裁判官がそれぞれ他者の発言の裏を読み、その意図を推論する。また、裁判官から見た弁護

士の評価（「原告代理人は、事実関係の調査も十分にできないだけでなく、法的な知識もない人かもしれない」（252頁）等）や弁護士から見た裁判官の評価（「この裁判官は、かなりシャープに論点を切り取ってくる。もう少し、やんわり、（中略）くらのコメントにとどめておいてほしいところではあるが」（190頁）等）といった、現に争点整理を見ても分からない、その裏にある攻防まで読めることは興味深い。

第4に、争点整理に関連するコラムも有益である。執筆者の制度に対する評価（「求釈明と当事者照会」（32頁）では当事者照会の積極的評価、「弁論準備手続での自白」（179頁）では活発な口頭手続へのコミット等）も表れていて面白い。

争点整理手続の形骸化、口頭での争点整理に習熟しない若手実務家の存在が指摘されている今、本書によって口頭手続の醍醐味が再確認されたことの意義は大きい。また、法科大学院教育における実務科目の副読本としても有用であろう。若手実務家はもちろん、法科大学院生、研究者など争点整理に関心を持つすべての者にとって必読の文献である。評者が研究活動を開始した約30年前は、民事訴訟実務の改善運動が全盛期にあった。それが民訴法改正に繋がったが、既に歴史上の逸話となり、争点整理をめぐる「技能の継承」が現下の課題である。本書はまさにそれに応えるものであるが、評者はそれとともに「情熱（passion）の継承」も重要と考えている。本書の随所に顕れている、より良い訴訟実務に向けた各執筆者のpassionに敬意を表し、1人でも多くの方が本書を手にすることを期待したい。